

芭蕉連句制作年代考

廣 田 二 郎

芭蕉連句の制作年代の考証は、芭蕉研究のための基礎作業として是非なされなければならないことの一つである。それを私は自分の芭蕉連句研究の立場から一応やってみて、その結論としての「芭蕉連句年譜」を小樽商大「人文研究」第十一輯（昭和三十一年一月）に発表した。その際、年代考証についても、なるべく近い将来に発表する考へであることを附記しておいた。その後、意外に長い年月が経ってしまったが、ようやく今年年代考証を発表する機会を得た。しかし、二百七十余の作品全体の考証をここに記することは紙幅の制限があつて許されない。そのため、全作品を幾回かに区切って連載するか、あるいは特に問題のあるものだけを取り上げて論ずるかのいづれかの方法をとらなくてはならないのであるが、連載といつても一年に一回の機会があるだけであり、他にあちこちと発表することも研究の性質上好ましいことではない。一応制作年代について問題のない作品でも、その成立の事情・条件をも含めて、日時の判明するものは、それまでも含めて、年代と成立の考証をすることが最も望ましいことであるが、発表のための条件を考へれば簡単に実現できることではない。それ故、やむを得ず、範圍を特に成立年代に問題のある作品に限定してここに取り上げて論ずることとした。

芭蕉の連句を集め、年代を推定したものには、蝶夢編『芭蕉翁俳諧集』（天明六年刊）・暁台編『幽蘭集』（寛政十一年刊）・奇淵編『芭蕉袖草紙』（文化八年刊）、仏兮・湖中編『俳諧一葉集』（文政十年刊）等がある。明治以後には、

芭蕉全集の中の一部として連句作品が編まれ、年代を附されたが、その中で最もすぐれてゐるものは、勝峯晋風氏の『新芭蕉一代集』（春秋社、昭和六年四月十五日発行）である。明治以前の連句集の年代推定にはやはり誤りが少くない。しかし『芭蕉翁俳諧集』以来の年代推定の業績の集成としての『一葉集』の年代推定は非常に大きく明治以後の編著にも影響し、たとへば勝峯氏における年代推定の誤りの原因を探ると、たいていそれは『一葉集』に在ることが見出されるといつたやうな状態である。かうした年代推定の誤りはその後の諸家の研究によつて大いに訂正されて来、荻野清氏編の「芭蕉年譜」（創元社『芭蕉講座』第四巻、昭和三十一年三月十五日発行）には、それらの研究の成果が大きくとり入れられ、『一葉集』以来の誤りが多数訂正されてゐることを見るのである。それで、ここで取り上げるのは、主として『一葉集』・『新編芭蕉一代集』（以下、略して『一代集』と記することにする）ならびに荻野氏の「芭蕉年譜」の年代推定について問題のあるものに限定してゆくことにする。なほ『一代集』以前の誤りを訂正した諸家の研究で荻野氏の年譜にその成果がとり入れられてゐるものについては、それらがこの年譜において集成されてゐるものと見なして、その一々の研究考証にふれることはしないことにする。

考証の記述の形式は、初にその作品の名を掲げ、その下に推定年代と出典をしるし、次行に立句と連衆一巡の名を記し、三行目以下に論証してゆくことにする。

1 薄紅葉百韻 —— 延宝五年作 ——

（『芭蕉 両吟百韻』
杉風）

色付や豆腐に落て薄紅葉

桃青・杉風

『一葉集』は延宝七年作、『一代集』は延宝六年作としてゐる。頼原博士の「芭蕉略年譜」（『芭蕉読本』）には六年

に成るかとなり、私も以前には六年作かと考へた。(新註国文学叢書『芭蕉連句集』昭和二十六年十二月)。荻野氏「芭蕉年譜」には、「此の年(六年)又は前年の作であらう。」とある。山崎氏の「略年譜」(朝日古典講座『芭蕉』所収)には賛川他石説(名著全集『芭蕉全集』)に従つて、この年(延宝五年)の作かとする。勝峯氏の書かれてゐるやうに、巻中の「心に叶ふ長持の蓋 杉風 送り膳道すこしだに隔てねば 桃青」の二句は『江戸広小路』(延宝六年秋成)に抄出されてゐるので、『一葉集』の七年説は成立しない。また、立句の「薄紅葉」は、秋季ではあるが九月に当る(『増山の井』)ので、この百韻を延宝六年作とすることも無理であらう。立句と『江戸広小路』成立の年代との関係から考へて、この百韻は、延宝五年作と推定すべきであらうと思ふ。

2 わすれ草歌仙 — 延宝五年作 —

(『一葉集』)

わすれ草煎菜につまん年の暮

桃青・千春・信徳

『一葉集』は延宝七年冬、勝峯氏は六年、頼原博士は「六年に成るか」とし、私も以前にはこの説に従つた。(『芭蕉連句集』)。荻野氏は五年作と推定。この発句は『江戸蛇之鮓』(延宝七年五月成)に採られてゐる。また『一代集』にもいふやうにこの歌仙中の「鎖がまもれて出たる三日の月 信徳 雲井に落る鴈の細首 桃青」といふ付合が『二葉集』(刊記は延宝七年九月、自序は同十一月)に抄出されてゐる。それ故、延宝七年以前の作と見られるが、立句に「年の暮」とあるやうに、この歌仙は年末の作であるから、その中の付合が七年十一月以前の『二葉集』に採られるはずはない。以上によつて七年説は成立せず、(『句選年考』には「延宝七年五月の選の『江戸の春集』に出でたり。」とある。間接的ではあるが、七年説を否定する。)延宝六年か、もしくはそれ以前の作でなければならぬことになる。然るに、連衆のうちの一人、信徳は、延宝五年冬江戸へ下り、六年の春へかけて桃青(芭蕉)・信章(素

堂)と『江戸三吟』の三百韻を興行、これを京都へ持ち帰つて出版し(三月)、さらに政定・仙菴と『京三吟』を興行し、これは六年八月下旬に出版してゐる。この信徳の動勢からすれば、彼が一塵して興行したこの年末作の歌仙は、六年作ではなく、五年作といふことになるであらう。

3 詩あきんど歌仙 ——天和二年作——

(『虚栗』)

詩あきんど年を貪り酒債哉

其角・芭蕉

『一葉集』・『一代集』ともに天和三年の作とし、小宮豊隆氏もやはり三年説をとつて居られるが(岩波文庫『芭蕉連句集』)・天和三年五月刊行の『虚栗』に、その年の末に作られた作品が載るといふことはない。二年々末の作であらう。同様の理由から

飽やことし歌仙 ——天和二年作——

(『虚栗』)

も天和二年作といはれるであらう。

4 発句・脇 ——貞享二年作——

(『春と秋』)

われもさびよ梅よりおくの藪椿

雅良・翁

『一葉集』・『新編芭蕉一代集』ともに貞享五年(元禄元年)作とするが、『野ざらし紀行』真蹟(『芭蕉図録』所収)の巻末に、この旅行中処々での酬和の句がしるしてあり、その中にこの作品も記されてゐるので、これは『野ざらし紀行』の旅の、伊賀滞在中(貞享元年十二月二十五日——二年二月中旬)の作であることが判明する。発句の季が春であるから、貞享二年作と見られる。なほ、右の真蹟により、発句・脇

イ、芭蕉野分その句に草鞋かへよかし
 ロ、宿まいらせん西行ならば秋のくれ
 ハ、華の咲身ながら草の翁かな
 ニ、霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申し
 ホ、檜の木の花にかまはぬすがたかな
 ヘ、夏草よあづま路まとへ五三日

三つ物

ト、梅絶えて日永し桜いま三日
 チ、我桜鮎割枇杷の広葉哉

歌仙

リ、師の桜むかし拾はん落葉哉
 ヌ、つくづくと榎の花の袖にちる

が、イ、ロ、ハ、ニ、リ、は貞享元年、ホ、ヘ、ト、チ、又は二年の作であることが確定できる。（『芭蕉図録』参照）。
 また、美濃の如行入門の時期も、貞享元年、あるいはそれより以前であることが推定できらるであらう。

5 市の梅歌仙未満

——貞享三年または二年作——

冬景や人寒からぬ市の梅

濁子・其角・はせを・仙化・枳風・コ斎……文鱗……李下

芭蕉連句制作年代考

李下・芭蕉 (『春と秋』)

雷枝・翁 (『春と秋』)

勝延・翁 (『春と秋』)

如行・芭蕉 (『後の旅』・『春と秋』)

芭蕉・秋風 (『春と秋』)

知足・桃青 (『千鳥掛』)

湖春・芭蕉 (『春と秋』・『熱田三歌仙』)

秋風・芭蕉・湖春 (『熱田三歌仙』)

嗒山・芭蕉・木因・如行 (『元禄風韻』)

桐葉・芭蕉・叩端・閑水・東藤……桂楫 (『熱田三歌仙』)

(『熱田三歌仙』)

(『幽蘭集』)

『一葉集』に貞享四年とし、『一代集』もこれに従ひ、この作品を「『笈の小文』旅行前、大垣藩士中川濁子の江戸邸に於ける興行であらう。」と述べてゐる。旅行出発前の作品ならば、発句は当然初冬の景物を詠んだやうなものでなければならぬ。(芭蕉が『笈の小文』の旅に出発したのは十月二十五日。)この時の餞別の作品をみてもその事は明らかである。(「旅のつと歌仙」・「初しぐれ四十四」・「江戸桜半歌仙」・「霜夜の鐘十句」・「時雨々々に十句」その他『句餞別』所収発句等。)しかし、この発句は、年末の冬暖の感じを詠んだものであり、発句の余情を付け添へた脇句も

となりを迷ふ入逢の雪

其角

とあり、これも旧暦十月の季感ではない。さうすれば、この作品を『笈の小文』の旅に出発する前のものとするには無理といはなければならぬであらう。連衆は濁子を除いてはみな江戸住の人たちであるから、この作品は江戸において興行されたものであらう。さうすると、貞享四年の冬は芭蕉は『笈の小文』の旅にあつたから『一葉集』および『一代集』の説は認めがたい。作風からいへば、貞享以後の作品といふやうに見られるが、芭蕉の冬季江戸に居つたのは貞享二、三年、元禄元、四、五、六年である。連衆の点から考察してみると、其角・仙化・枳風・コ斎・文鱗・李下はいづれも貞享三年一月の「鶴の歩み百韻」の連衆であり、また『句餞別』に名を連ねてゐる作者たちである。さうして、元禄元年に芭蕉に接近してゐた作者たち(曾良・苔翠・友五・路通等)や、元禄四、五、六年の代表的な連衆(桃隣・洒堂・許六・史邦等)が一人も加はつてゐないことを考へれば、この作品は貞享二、三年のものと思つた方がよい。さらにもう一度作風を立ちかへり吟味してみると、この点からもやはり元禄期よりも貞享期と見るべきもののやうである。それならば貞享の二年、三年のうちのいづれかといふことになるが、濁子が一座してゐる関係から(濁子は『句餞別』の江戸桜半歌仙入立句濁子Vの連衆に加はつてゐる。)三年の方に比重をかけて見た方がよいと

思はれる。

6 発句・脇 — 貞享四年 —

(『冬のうちわ』)

枯枝に鳥のとまりけり秋のくれ

はせを・素 堂

『一葉集』は天和四年(貞享元年)作とし、『一代集』もこれに従つてゐる。発句は『東日記』(延宝九年六月成)に枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

と発表されたものである。(『ほのくゝ立』——延宝九年三月序——には「枯枝カレエダに鳥(イノ)とまりたりや秋の暮」といふ形で出てゐる。)それ故、発句は『東日記』あるいは『ほのくゝ立』の句形においては、すでに延宝八年以前にできてゐたのであるが

かれ朶に鳥のとまりけり秋の暮

といふ形に推敲されて発表になつたのは『阿羅野』(元禄二年三月芭蕉序)においてである。『阿羅野』と同じく荷兮の撰になる『春の日』(貞享三年八月下旬刊)に発表されてゐないから、再案の句形は貞享三年以後元禄元年以前になつたものと一応考へられる。脇句

鍬かたげ行人霧の遠里

素 堂

は、貞享の作風となつてゐるから、この付合は、やはり、初案の句形のできた延宝末年のものではなく、再案の成つた時期と考へられる貞享年代のものとするべきであらう。それならば貞享三年以後元禄元年までの何れの年かといふことを考へてみると、貞享三年推敲が成り、脇が附けられたと考へるには『春の日』刊行の時期の関係からみて無理があるであらう。(实景に感じての句とすれば晩秋の句であるが、これは発想の中心は秋夕の閑寂味にあるのであり

従つて『東日記』でも『阿羅野』でも晩秋の部には置かれてない。さうすればこの推敲が貞享三年秋に成つたとして貞享三年八月下旬刊の『春の日』に採られ得ないこともないであらうが、名古屋と江戸との距離、刊行の進行状態などから考へてみて貞享三年説は無理であらう。(それならば四、五年のどちらかといふことになるが、この付合を収録する『冬のうちわ』(鳴海の鉄叟・蝶羅編)には、付合の前書に『千鳥掛』に洩れたそのひとつふたつを拾ひ集めて故翁(芭蕉)遠忌の手向草とする旨を記し、連句としてはこの付合ならびに貞享四年十一月六日興行の「翁草歌仙」を収録してある。鳴海の知足の許に、特にこの付合が書きとめられ、残されてあつたのは、おそらく『笈の小文』の旅の出発前にこの付合が成り、そのことが芭蕉知足の俳談の折に話題に上つたからではなからうか。そのやうに考へてみれば『笈の小文』の旅から帰つた(貞享五年)元禄元年の作に作つたものと考へるよりも、旅に出発する前の貞享四年秋にこの付合が成つたものと見るべきであらう。

7 発句・脇 —— 貞享四年 ——

(『熱田皺笥物語・熱田三歌仙』)

檜笠雪をいのちの舎り哉

桐葉・翁

『一葉集』に貞享元年とし、『一代集』も同じく元年とする。貞享元年の冬にも芭蕉は熱田の桐葉のところに滞在してゐるから(『野ざらし紀行』の旅)、この年の作と見られないこともないが、しかし、この時は鳴海から直ぐに故郷伊賀へ帰つてゐて、この句の前書「翁みの路へうち越んと聞えければ」(熱田三歌仙)、「翁是より美濃路へうち越んと聞えければ」(皺笥物語)との關係に無理が生ずる。つぎの『笈の小文』の旅における熱田滞在の場合を考へてみると、芭蕉は十一月中旬、三河の保美に杜国を訪ねてから十六日鳴海の知足の所に戻り、二十一日熱田の桐葉亭に赴き二十五日まで滞在、二十四日には「雪の花歌仙」(芭蕉・桐葉両吟)が成つた。以下美濃關係を中心に述べれば

二十五日には名古屋の荷兮亭に至り、翌日折から名古屋に來た岐阜の落梧に芭蕉を招かうとする

凧の寒さかねよ稲葉山

の句があり、それを立句として、荷兮・越人・羽笠・舟泉・野水一座の歌仙（未滿三十句）があつた。十二月一日に熱田の桐葉亭に戻り、來あはせた大垣の如行と三吟半歌仙（立句 旅人と我見はやさん笠の雪 如行）を卷いた。十二月三日には、名古屋の夕道亭で表六句興行（立句 霰かとまたほどかれし笠やどり 如行）。この間の消息を『笈の小文』では

此間、美濃・大垣・岐阜のすきものとぶらひ來りて、歌仙あるは一折など度々に及。

とするしてゐる。さうして芭蕉は結局この折にも美濃へは赴かなかつたけれども、度々招かれ、また彼自身も美濃へ訪れてみようと思ひ立つたこともあつたであらう。それ故、「是より美濃路へうち越ん」といふやうな話も出たこともあつたであらう。貞享元年と四年の熱田訪問の外には、芭蕉が冬季熱田から美濃へ出かけようとしたと考へられる旅はなかつたのであるから、この兩度の旅のいづれの時においてこの付合が成つたかと考へれば、四年と見た方が妥当であらうと思ふ。

8 水 仙 歌 仙 — 元禄二年 — (『春と秋』)

水仙は見るまを春に得たりけり 路通・李杳・翁・龜仙・泉川

荻野氏は、この歌仙は元禄二年正月の興行と考へられるといつて居られる。『一葉集』・『一代集』はともに元禄四年作とし、小宮氏も元禄四年とする（『芭蕉連句集』）。『芭蕉翁俳諧集』には元禄六年の部に収めてある。賛川他石氏の『芭蕉全集』には

芭蕉連句制作年代考

此卷『春と秋』にあり。『一葉集』は元禄四年とす。されど四年正月頃路通は江戸に在り、芭蕉は天津に在りたり。又六年には路通芭蕉より遠ざかり居りたれば、此卷は元禄三年と推定すべきか。

と述べてゐる。四年説、六年説の成立しないことは右の他石説によりて明らかである。しかし、これだけで直ちに三年作と決めてしまふわけにはゆかないであらう。もつとほかの年にまで制作の可能性をひろげて考へられないであらうか。ところが、この歌仙は脇に

窓のほそめに開く歳旦

李 杳

とあるところから大体正月の作と見られるのであるが、芭蕉と路通とが正月に一座する条件が揃つてゐるは元禄二、三の両年だけである。（「衣装して梅改むる歌仙」の項参照）。従つて制作年代の可能性をひろげてみても、この両年だけに限定されるわけである。さうすると、この両年のうちのどちらと考へた方がいいかといふことになる。ここで、他の三人の連衆の関係から年代が定められないだらうかと考へてみると、李杳・亀川・泉川の三人はこの歌仙一卷にあらはれるだけで、他の芭蕉連句作品には全く見られず、また七部集にも全くその作が採られてゐない。従つて、いかなる人物かも判明せず、この三人の関係からは年代は推定できない。連衆の関係から考へるとすると、芭蕉と路通とからみてゆくほかはないことになる。それで、この両年における芭蕉と路通の関係をみてみると、芭蕉に逢つてみたくて路通が江戸に下つたのは貞享五年（元禄元年）の春であつた。しかるに芭蕉は『笈の小文』の旅中で不在であつた。路通はそのまま江戸に在つて芭蕉の帰りを待ち、八月下旬師が『更科記行』の旅から帰るのを迎へて対面した。以後路通は九月十日の素堂亭の観菊会、十三夜の芭蕉庵の月見の宴の一座に連なり（『笈日記』）、この冬、曾良・夕菊・友五・苔翠などと『幽蘭集』所収の三歌仙を芭蕉のさばきの下に巻き、十二月十七日には師と曾良その他門人六人と「深川八貧」の句があつた。（路通真蹟）。明けて元禄二年春には芭蕉・曾良・前川と「衣装して梅改むる

歌仙」(『真向翁』)一卷があつた。その間の師との風交の状態は

翁も頃日帰庵なりしかば、かぎりある命に、求がたき願ひみちて、侘るにつのり、詠ずるに高し。昼は杖を攀、杵を曳て、志を雲一雨の外にあそばしめ、夜はともしびをとり、机にそひて、おほくは千古の余を論ず。かならず世をいろひ、人を誘るとはなけれど、目なれ聞馴れし、上さま下さまの品など、物ずきにいひのゝしるは暫一時の情をむすぶなるべし。

(反店文)

かうして、「此春も春めき」また流浪の思ひをもよほされて路通は江戸を去るのである。さうして、秋八月には、奥羽の行脚を終つて敦賀の津まで来つた芭蕉を出迎へ、以後、大垣・伊勢・伊賀・奈良等に伴はれ(『曾良日記』・『全伝』)さらに落柿舎・湖南等で芭蕉に親炙する機会を得た。それから元禄三年正月三日、師と別れ、以後顔を合はせたことなく(元禄三年四月十日附、此筋・千川宛芭蕉書簡、「且又路通正月三日立別、其後逢不申候。頃日ハ用事有之、江戸へ下り候よしにて、定而追付帰可申候。')三月下旬頃湖南で珍碩・芭蕉の「発句・脇」をついで、珍碩と歌仙一折(『ひさご』春の草歌仙)を巻いたが、後江戸に下つた。さうして、西上は翌四年夏となつたが、ここにふたたび師に親炙することを得て「蠅ならぶ歌仙」(『折つゝじ』)、「牛部屋歌仙」(『星会集』)、「月の雲歌仙」(『堅田集』)、「稻の穂並歌仙」(『菊の露』)の四歌仙に一座し、師のさばきを受けた。一方、芭蕉の方は、年末大津に智月を訪ね、膳所で越年。三年正月三日(または四日)伊賀に帰り、三月までおほむね他出しなかつた。右の様な芭蕉・路通の関係であり、元禄二、三年の間においては、まだ路通も同門の間にも反感を持たれて居らず、また師に対する驕慢の心も持つてゐなかつた。それ故、芭蕉・路通の関係だけからは、二、三年のいづれの作とも決しがたいが、もしも三年に成つたとすれば、この歌仙は元日から三日までの間に湖南において作られたのでなければならず、また連衆のうちに膳所の曲水・怒誰とか、大津の乙州・智月など湖南の俳人たちが誰か加はるはずである。然るに膳所・大津の俳人が

一人も一座せず、また李杳以下の他に全然所見のないやうな連衆と湖南において俳諧興行したとも考へられない。やはり、二年正月にこの作品は江戸において成つたものと見る方が無理が少いであらう。それで、荻野氏がこの歌仙を二年正月の興行と考へられると述べて居られるのを採りたい。

また、この歌仙の付句のうちに『笈の小文』の旅の回想から出たものと思はれるものがある。

陀袋さがす木曾の椽の実

路通

月の宿亭主盃持出でよ

芭蕉

いつたい『笈の小文』の旅のあとになつた作品では、旅中の回想、経験から連想されたと見られるやうな付合が多い。

人去ていまだ御座の匂ひける

越人

初瀬にこもる堂の片隅

芭蕉

(『曠野』雁がね歌仙)

行雁におくれて一羽残けり

夕菊

沖に舟見る敦盛の塚

泥芹

(『はしらこよみ』月出ば行燈消サン半歌仙)

入過て余しよし野花の奥

芭蕉

何が何やらはるのしら雲

前川

(『真向翁』衣装して梅改むる歌仙)

身はかりそめに猿の腰かけ

此筋

いざよひも同じ名所に帰りけり

曾良

(『雪まろげ』かげろふ歌仙)

それ故、この「木曾の椽―月の宿」の付合も、やはり『笈の小文』の旅中の回想談が連想の奥底にあつたのではなからうか。また、この歌仙中

聳入に茶売も己が名を替て

李 沓

恋に古風の残る奥筋

芭 蕉

といふ付合もあるか、これはその時すでに芭蕉の心中に描かれてゐた『奥の細道』の旅への心のうごきから来た連想であらう。これらのことも二年説を裏付ける一つの条件とならう。さらに最後に付け加へておきたいと思はれることは、『一葉集』においては、連衆の李沓が残香、龜仙は此筋、泉川は千川となつてゐることである。残香・此筋・千川は大垣藩士であり、この三人がどうして李沓・龜仙・泉川と入れ換つたか、また両方の関係はどういふことになるのか、さらに本作品の伝来がどうなつてゐるのか考察されなくてはならないことではあるが、それは後日に調査するとしてもかりに李沓等でなく残香等の作品とすれば、この連衆の顔ぶれから考へてもちろん三年正月に膳所での歌仙が巻かれたと見るのは無理であり、二年正月江戸において在府の大垣藩士たちと興行したと見なければならぬであらう。

9 衣装して梅改むる歌仙 — 元禄二年 —

(『真向翁』)

衣装して梅改むる匂ひかな

曾良・前川・路通・はせを

『一葉集』・『一代集』ともに元禄四年の作とする。小宮氏は元禄四年?とする。しかし、元禄四年の春には芭蕉は上方に、路通は江戸に居り(『勸進牒』)、この兩人が一座することはないので、四年作といふことは考へられない。いま、路通の動勢について略述すると

延宝二、三年頃より乞食生活。

芭蕉連句制作年代考

貞享二年三月頃芭蕉の門人となる。

貞享五年（元禄元年）春江戸に芭蕉を訪ねて下つたが旅中にて不在。八月下旬『笈の小文』・『更科紀行』の旅を終へて帰つた芭蕉に対面。以後翌年春まで芭蕉に親炙。

元禄二年春、江戸を去る。（返店ノ文）

同年八月、奥羽行脚を終つた芭蕉を敦賀の港に出迎へる。

その後、伊勢・伊賀・奈良・京・湖南等に芭蕉に随従。元禄三年一月三日、芭蕉と別る。以後芭蕉と会ふ機会を持たず、同年春江戸へ下る。ついで奥羽行脚。冬江戸に在り、句勸進を始む。（十一月十八日）

元禄四年春、東下の乙州等と歌仙あり。『勸進牒』成る。秋湖南に在りて師に親炙し、蠅ならぶ歌仙（『折つゝじ』）

・牛部屋歌仙（『星会集』）・月の雲歌仙（『堅田集』）・稲の穂並歌仙（『菊の露』）等に一座す。この後次第に芭蕉ならびに門人から疎隔。

元禄七年芭蕉最後の旅の際、師への不義理を許された。（『芭蕉翁行状記』）

右によつてみれば、芭蕉と路通が春季に一座することのできるのは、元禄の二、三の両年だけとなる。さらにこの巻の連衆には立句の作者曾良と大垣藩士津田前川がある。この四者が相会する機会を持つことができる可能性があつたのは、さらに時間が限定せられて元禄元年秋から二年三月『奥の細道』の旅の出発までの七箇月ほど（この間前川が江戸詰であつたとして）と、この旅の最後、九月三日大垣における芭蕉・路通・曾良・前川の再会以後、九月六日芭蕉・曾良・路通が伊勢の遷宮拜觀のため大垣を出発するまで（この時は前川は大垣に在つて芭蕉を迎へた——『奥の細道』大垣着の章——）の四日間限定される。このうち、元禄二年九月の場合は、立句の春季に合はない。従つて、この歌仙が作られたのは元禄二年の春といふことになる。前川がこの時江戸詰であつたといふことをこの歌仙以

外に証明する資料は見出せないが、江戸の藩邸に詰めてゐたことは考へられることである。推論の手順は逆になるが、しむろこの歌仙に一座してゐることが、彼がその時江戸詰であつたことを立証するものであらう。

10 発句・脇 元禄二年作

(『後の旅』)

胡蝶にもならで秋ふる菜むし哉

芭蕉・如行

『一葉集』に元禄四年作とし、『一代集』もこれに従つてゐる。元禄四年芭蕉が帰東の途次に如行亭に立ち寄つての作と見たものであらう。しかし、四年帰国の際には、十月初旬、江東平田の明照寺に李由を訪ひ、それから美濃に至つてゐるのである。美濃に入つたのはすでに初冬で、この時美濃の地で作られた連句を見ると

元禄四年の初冬茅屋に芭蕉翁をまねきて

もらぬほどけふは時雨よ草の屋ね

斜嶺

(『後の旅』)

を立句とする半歌仙、ならびに発句脇として

芭蕉翁行脚の時、予が草戸を叩きて、作りなす庭に時雨を吟じ給ひ、洗ひ揚たる冬葱の寒さを見侍る折からに

木嵐に手をあてゝ見む一重壁

(規外)

四日五日の時雨霜月

翁

(『国の花』)

があつて、もはや「秋ふる菜むし」の季節ではなくなつてゐるのである。その点に四年説は矛盾を来たす。『後の旅』(如行著)を記ると

蓬葎の寂寐の下にきりぐすを聞て、千百余里の嶮難終にかうべをしろふして、みのゝ国我さとにうつり給。句どもあまた有。此事は『おくのしほり』にのこし給へば大形はもらしつ。

胡蝶にもならで秋ふる菜むし哉

とあるので、元禄二年、奥羽の旅を終へた芭蕉が「如行が家に入」つた（『奥の細道』）の時の作であることが判明する。その時芭蕉を迎へた如行自らが記したところであるから、これに従ふべきであらう。

11 発句・脇 —— 元禄三年 ——

（『みつのかほ』）

見送りのうしろや寂しきりくす

翁・野水

『一代集』には元禄四年作と推定してゐる。前書に「野水が旅行を送りて」とあるから、彼が京か湖南か江戸か、とにかく遠隔の地へ出向いた場合が考へられよう。（大垣や岐阜辺までの旅では、このやうな饑別の句を送ることもないであらう。）脇句に

来る春までと柳ちる陰

野水

とあるから、長い間の別れを惜しむ、しみじみとした気持ちが出てゐる。野水の旅行を送るといへば、彼が名古屋から出立つのを送る場合と、旅先から帰郷するのを送る場合とが考へられる。前の場合を考へれば、芭蕉が秋季に名古屋を訪れてゐるのは、元禄元年の七月から八月にかけての期間だけである。すなはち、七月七日名古屋から鳴海の知足亭に至り、同十四日名古屋へ赴いた。八月三日、名古屋に在つたが（知足真蹟）、同月上旬しばらく熱田桐葉亭に滞在した。八月十日頃越人とともに信州更科の月見に赴く、といった動勢である。この間に野水が旅行に出立つたことも知られてゐないし、また、七月から八月初にかけての作とすると、脇の「柳ちる陰」が季節が少し早すぎる。また「見送りのうしろや寂し」といふのは、名古屋から所用で出かけるのを送るとしてはさびしすぎるであらう。そこで、この場合の作と考へるのには少し無理があるであらう。

つぎに、野水が旅先から帰るのを芭蕉が送る場合と考へれば、元禄元年、二年を除けば貞享二年から元禄七年までのいづれの年でもその可能性が考へられるわけである。その場合、野水ほどの作者であるから、旅に出て芭蕉に逢つてゐるとすれば何か資料が残るわけである。ことに元禄に入つてからは、芭蕉関係ではいろいろと残されてゐる資料が多いのであるが、野水が芭蕉をはるばると訪ねたことを示す資料は元禄三年にあるだけで他の年にはない。元禄三年には、野水は幻住庵に師を訪れ、その折の吟

くさめのあとしづか也なつの山

は「凡右日記」（『猿蓑』）にしるされてゐる。また、八月下旬乃至九月の興行と見られる「灰汁桶歌仙」（『猿蓑』）の連衆として凡兆・去来とともに芭蕉のさばきを受けてゐる。この度の芭蕉訪問の旅の際の餞別と見れば、脇句の季節にも無理がないし、また「来る春まで」と契る情も極めて自然に受けとれよう。勝峯氏の推定せられる元禄四年の晩秋は芭蕉自身が東下しつつかつた時期で、野水が京・湖南辺で芭蕉に出逢つたことは資料もないし、考へにくいことである。また、四年秋とすれば、脇の「来る春まで」とは芭蕉の東下りの予定を矛盾する。それ故この作品は、元禄三年秋の作と推定するのが最も無理がないことになるであらう。

12 鳴やほととぎす歌仙

——元禄六年作——

（『鄙懐紙』）

風流のまことを鳴やほととぎす

涼葉・芭蕉・青山・曾良・濁子・嵐蘭・岱水・曲翠・嵐雪・怒誰

『一葉集』に元禄五年とし、『一代集』もこれに従つてゐる。荻野氏・吉田義雄氏（芭蕉連句考）は六年作とする。連衆のうちに、江戸大垣俳人のほか、曲翠・怒誰の両膳所俳人が加はつてゐる。怒誰は、彼宛の元禄五年七月二十四日附芭蕉書簡によれば、すでにその時江戸に居つたこと、また同時に曲翠はまだその時江戸には居らなかつたことが

わかる。また同書簡には曲翠は「来る二日、三日下着之由」とあるので、八月の初旬には江戸に着いたであらうことを思はせる。曲翠宛の芭蕉書簡（元禄五年二月十八日附、同年九月十七日附）によつても、五年の夏頃はまだ曲翠は膳所にあり、秋になつてから江戸に下つたことがわかるのであり、この歌仙が元禄五年に成つたとは、言ふことができない。江戸滞在中の曲翠には、芭蕉から五年十二月、六年一月二日、二月八日としばしば書簡が書かれてゐる。（書簡による考証は吉田氏の「芭蕉連句考」に詳しい。）また『藤の実』（元禄七年刊）には、「芭蕉庵にて 夕立や風をゆり込軒の声 曲翠」といふ句が見られる。曲翠が六年の夏期まで江戸に在つたといふことが推定せられるので、この歌仙は、元禄六年の作とする荻野・吉田説が妥当である。七年作と見ることは、嵐蘭が元禄六年八月に死去してゐることから不可能である。

13 朝顔歌仙 — 元禄六年作 —

朝顔や夜は明けきりし空の色

史邦・沾圃・翁・魯可…里圃・乙州

（『翁草』）

初茸歌仙 — 元禄六年作 —

初茸やまだ日数経ぬ秋の露

翁・岱水・史邦・半落・嵐蘭

（『猿舞師』）

鴉の声歌仙 — 元禄六年作 —

帷子は日々にすさまじ鴉の声

史邦・はせを・岱水

（『芭蕉庵小文庫』）

「朝顔歌仙」は『一葉集』に元禄五年、『一代集』に元禄六年とする。「初茸歌仙」、「鴉の声歌仙」は、『一葉集』、『一代集』いづれも元禄五年作とする。荻野氏は三歌仙とも六年説。この三歌仙には、いづれも史邦が一座してゐる。史邦の東下では元禄六年夏なので（市橋鐸氏『史邦と魯九』）なので、すべて六年作となる。

名月やさくふく雨のはれをまて

濁子・芭蕉・千川・涼葉・此筋

『一葉集』・『一代集』には元禄五年作とする。荻野氏はこの半歌仙については触れてゐない。この作品を元禄五年作とみたらどういふことになるであらうか。千川・此筋の両大垣藩士は、この時江戸詰であつた。同じく大垣藩士の濁子・涼葉については、その動勢を審にし得ないので、このことから、五年説について、可否は論ぜられない。濁子の立句は『三日月日記』に採られてゐる。『三日月日記』の「望月」の部には

名月や門に指くる潮頭

芭蕉

(『桃の実』・『陸奥千鳥』)

以下、三十七句の名月の吟が収められ、濁子の句も

名月やさく吹雨の晴をミむ

といふ形で出てゐる。ここに見える門人達の句で『三日月日記』以外の俳書に採られたものをみてみると

川筋の関屋は幾つけふの月

其角

(『桃の実』・『流川集』・『旅館日記』)

かはぞひの畠を歩行月見哉

杉風

(『杉風句集』・『旅袋』・『節文集』)

名月や草の闇にも白き花

左柳

(『続猿蓑』)

侍も露になりたる月み哉

史邦

(『芭蕉庵小文庫』・『薦獅子』)

名月や先蓋とりて蕎麦をかぐ

嵐雪

(『玄峯句集』・『桃の実』)

稲の香や我養てけふの月

桃隣

(『桃隣句集』・『流川集』・『旅館日記』)

(註 他の俳書に採られる際、多少句形、用字の相違してゐるものもある。煩を避けて一々その異同を示すことは省いた。)

といふやうになつてゐる。『桃の実』（元禄六年刊）、『流川集』（元禄六年刊）、『薦獅子』（元禄六年刊）、『旅館日記』（元禄五年起稿。許六が同年七月東下の際の句日記として起稿、旅寓中の自他折々の吟その他を録す。）等に芭蕉・其角・嵐雪・史邦・桃隣等の句が載つてゐることからみれば、これらの句はおそらく元禄五年の作であらう。また『三日月日記』にだけしか録されてゐないが

松島にて

松しまや物調しけふの月

呂丸

名月はふり能馬よきをあゆませよ

重行

此句は呂丸旅立に送り侍るよし爰に印ス

とある二句も、呂丸の松島を見て江戸に出たのが元禄五年であることから、元禄五年の作であることが知られる。以上から見れば、右に挙げた以外の句もおそらく元禄五年作であると推定せられるであらう。さうとすれば、当然濁子の句も元禄五年の作といふことになる。しかし、この句を元禄五年作といふのには少し問題がある。それは、この句は名月の晩に雨が降つてゐることを詠んでゐることである。三十七句のうち、芭蕉・其角・杉風の句をはじめ、大多数は美しく照り輝く月光を描写してゐて、雨が降つたと見られるやうなことは表現されてゐない。雨が降つてゐることを確実に詠んでゐるのは濁子の句のほかは

ふればとて宵から八寝しけふの月

雨洞

一句があるだけである。この二句があることで、元禄五年の十五夜に雨が降つたといふことはいひきれないであらう。それより、この仲秋の雨の句は、元禄五年以外の年になつた句であるといふことが考へられてよいであらう。『三日月日記』に採られた句の作者のうち、千川・左柳・此筋は江戸詰であり、許六も丁度当時江戸に出て来て居つた。こ

これらの江戸滞在中の門人と江戸俳人には、近作未発表の名月の句を求めたことであらう。しかし、膳所の曲水・里東・酒堂、京都の去来・史邦等の遠隔の地に在った門人の句は、はるばる書信によつて寄せられたり、その他の方法によつて芭蕉に集められたものであらうから、かならずしもこの年の作品でなく、それ以前の作もあつたかもしれない。たとへば去来の

山野に逍遙して

岩はなや爰にも月の客独

などは、有名なことであるが、『去来抄』に

先師上洛の時、去来曰、酒堂ハ此句ヲ「月の猿」と申侍れど、予ハ「客」勝なんと申。いかゞ侍るや。先師曰「猿」とハ何事ぞ。汝、此句をいかにおもひて作せるや。去来曰、明月に乘じ山野吟歩し侍るに、岩頭又一人の騷客を見付たると申。先師曰「こゝにもひとり月の客」ト、己と名乗出らんこそ幾ばくの風流ならん。たゞ自称の句となすべし。此句は我も珍重して『笈の小文』に書入ける、とん。

元禄五年成の『三日月日記』に採られたこの句は、すでにその前に芭蕉が上洛した時に知られてゐて、その撰集中の『笈の小文』に書入れられてゐたのである。もつとも、この句の客・猿問答は芭蕉が元禄七上洛の際の話であるかもしれない。しかし、元禄五年の『三日月日記』にすでに採られてゐた句について、七年上京の際にこと新しく議論を持ち出すといふことは、この間に時日が経ちすぎることであらう。ことに、その間には、五年から六年にかけて酒堂東下のこともある。従つて『奥の細道』の旅の後、四年晩秋まで芭蕉が上方にあつた時にこの議論はあつたものであらう。しかるに、この月の句は『猿蓑』にしろされてゐない。三年に出来た句ならば、芭蕉がこれだけ激賞した句であるから『猿蓑』に採られないはずはない。従つて、去来のこの句は、元禄四年の作と推定せられる。この句だけ

でなく、他の俳人の作品についてもほかに元禄四年、あるいはもつと以前の作品も入つてゐるかもしれない。そのやうに考へれば江戸に在つた門人達の句でも未発表のものであつたらこの時芭蕉に採られたものかも知れない。当然すぎることをいふやうであるが、ここに掲出された三十七句のうちの大多数は、元禄五年作であらうが、中にはそれ以前の作も混入してゐるであらうといふことになるであらう。さうして、濁子の句は、元禄五年といふよりも、それ以前の作であらうといふことが推定せられる。この立句が元禄五年以前の作といふことになる、貞享以後、この連句の制作年代も、いづれの年かといふことにまでなるが、元禄二、三、四年は芭蕉が大垣藩士と一座して秋季に俳諧興行することは、この間における彼の動勢からしてあり得ないし、また貞享年間作といふことは、この連句の作風が晩年の軽みに移りつつあることを示してゐることからみて、考へられない。結局、元禄五年以前に成つた発句を立句として、後の五、六年のいづれかに連句を興行したと考へるほかはない。それで、ここで、また五年作か六年作かといふことに考察は立ち戻ることになる。

元禄五年、芭蕉が大垣の連衆と巻いた連句作品には左の二巻がある。(「さゝふく雨半歌仙」を除いて)

月しろ半歌仙——月しろをいそぐやうなり村時雨 千川・芭蕉・此筋・左柳・洒堂・海動・岱水・嵐蘭・文章

(『桃の白実』)

入湯半歌仙——木枯しにうめる間おそき入湯哉 荊口・洒堂・芭蕉・此筋・左柳・大舟・千川 (『鄙懐紙』)

また、元禄六年における大垣の連衆との連句作品は六巻ある。(「さゝふく雨半歌仙」を除いて)

河豚の非歌仙——野は雪に河豚の非をしるわかな哉 涼葉・千川・芭蕉・宗波・此筋・濁子・左柳 (『鄙懐紙』)

篠の露歌仙——篠の露袴にかけし茂り哉 芭蕉・千川・涼葉・左柳・青山・此筋・遊糸・大舟(『鄙懐紙』)

鳴やほゝぎす歌仙——風流のまことを鳴やほゝとぎす 涼葉・芭蕉・青山・曾良・濁子・嵐蘭・岱水・曲翠・嵐雪

〔鄙懐紙〕

いざよひ歌仙——いざよひはとり分闇のはじめ哉

芭蕉・濁子・岱水・依々…馬寛…曾良…涼葉〔鄙懐紙〕

十三夜歌仙——十三夜あかつき闇のはじめかな

濁子・曾良・芭蕉・史邦・杉風・岱水・涼葉〔鄙懐紙〕

芹焼歌仙——芹焼やすそ輪の田井の初水

芭蕉・濁子・涼葉〔鄙懐紙〕

この兩年における作品をならべてみて考察すると

一、五年作の二巻には洒堂が加はつてゐるから「さゝふく雨の巻」が五年に作られたならば、ここにも洒堂が入つてゐるべきであるが、彼は一座してゐない。(五年九月東下以来、洒堂はこの二巻のみならず、十二月の「水鳥歌仙」興行に至るまで、其角系グループで興行した「梅椿歌仙」を除いたすべての歌仙・半歌仙―計八巻―の連衆に加はつてゐる。——勿論端物は別としてである。——)

二、六年秋には、いざよひ、十三夜と月をテーマにした立句で、大垣連衆と続けて連句興行して居り、これに名月の「さゝふく雨」の巻を加へると、ちやうど名月、十六夜、十三夜と一連のまとまつた作品体系となる。

三、「いざよひ歌仙」、「十三夜歌仙」ともに濁子・涼葉が連衆として入つて居る。「さゝふく雨半歌仙」にもこの兩名が入つてゐる。しかるに「月しろ半歌仙」、「入湯半歌仙」にはこの兩名が加はつてゐない。

四、五年より六年の方が芭蕉と大垣の連衆との関係がずっと緊密になつてきてゐる。

以上によつて「さゝふく雨半歌仙」は六年作であると推定せらるべきであらう。立句の前書に「仲秋雨懐故人」とある。おそらく、岐阜の俳人落梧(元禄四年歿)のことでも思つて作られた句であらうか。落梧が『瓜畠集』撰集中に歿したので、支考はその志を哀んで『笈日記』の中に「瓜畠集」の一章を設け、この未完の撰集の俤を伝へてゐる。そのなかに

名月

蝙蝠の飛をくまなる月見哉

落 梧

此月見今年の米のほひかな

蕉 笠

十六夜

いざよひのいづれか今朝に残る菊

翁

十七夜

月の名もまだあるうちぞたのもしき

落 梧

九月十三夜

後の月又めづらしや秋茄子

杏 雨

と名月から十三夜にかけての月をテーマとした句が並列されてゐる。六年当時はまだ『笈日記』は編まれてゐず、従つて「瓜畠集」もまとまつた形で芭蕉やその門下の下には見られなかつたかもしれない。しかし、秋の月の頃に、大垣の連衆と座をともしした時、月を愛した俳人落梧のことが話題にのぼり、彼を懐ふ「さゝふく雨」の発句に話が及び、それを立句として彼をしのんで歌仙一折の興行があつたとしても不自然ではない。元禄五年以前になつた（おそらく元禄四年作）と思はれる発句を立句として連句を巻く、といふには、おそらくかうした事情があつたからのことであらう。それ故にこそ、わざわざ「仲秋雨懐故人」といふやうな前書をことさらこの一折の前書として記したものであらう。

後風鳶の身振ひの猶寒し

玄虎・舟竹・芭蕉

『一葉集』・『一代集』ともに元禄二年作とする。荻野氏も二年冬の作か（三年の冬とも考へられる。）といつて居られる。二年冬といふことも、芭蕉は同年九月中旬から十月一杯、伊賀に滞在してゐるから考へられないこともない。三年冬にも伊賀にかなり長く滞在したやうであるから、荻野氏は「三年の冬とも考へられる」といつて居られるのであらう。『一代集』は『一葉集』の年代推定に従つたものであらうが、『一葉集』は何によつて二年と推定したものが不明である。

芭蕉が玄虎・舟竹と巻いた連句は他に芭蕉の

菜根を喫して終日丈夫に談話ス。

ものゝふの大根苦きはなしかな

を立句とする表六句がある。これは真蹟懷紙が現存して居り、また『金蘭集』・『一葉集』にも採られてゐる。この表六句は『一葉集』も『一代集』も元禄六年作とし、荻野氏も六年冬の作としてゐる。この作品については『全伝』に

酉（元禄六年）の冬

武士の大根苦（辛^イ）きはなしかな

戌の春

花見にとさす船遅し柳原

右二句玄虎子の旅館にて即興也。大根に一折、花見に六句ありといふ。

としるしてあり、また『句選拾遺』に「元禄六西玄虎子東武旅館に会の時の事也。此句にて一折。亀毛所持ワキハ周竹にて三吟」と頭註してある。いづれも後の資料であり「大根に一折」といつても表六句よりないのであるが、『全

伝』は伊賀に伝へるところがあつて、それに拠つたものと思はれるのもつとも確実性が多い芭蕉伝記とされてゐる。『一葉集』・『一代集』そして荻野説もこれに拠つて元禄六年といふことにしてゐるのであらう。

「後風二十四句」に考察をもどすと、この作品を録してある『冬扇一路』には

亀毛といへる人の家に猶翁真蹟かず多し。是を拝し、其内より左の一篇を写とゞむ。

と記して「歌僊未満」と端書きし、この二十四句を掲げてある。「大根の表六句」についても『句選拾遺』には「此句にて一折、亀毛所持」と註してあつた。同じく亀毛によつて持ち伝へられたこの二十四句も、やはり元禄六年冬江戸の藤堂藩邸において作られたものではなかつたか。『全伝』に伝へるところによつても、芭蕉は六年冬のみならず七年春にも玄虎邸を訪問し、自らの発句を立句として連句を作つてゐる。この間に『全伝』には記されてゐないにしても、玄虎の発句を立句として連句を巻いたこともあつたとしても不自然ではない。

玄虎は藤堂氏（本姓は渡辺氏）。名は長兵衛、字は守寿、通称半三郎。伊賀上野藤堂藩士、禄千五百石。『続猿蓑』・『有磯梅』等に入集してゐる芭蕉晩年期の門人である。さうして、いま「大根の表六句」（真蹟）を掲げてみれば

ものゝふの大根苦きはなし哉

はせを

一とをりゆく木枯の音

玄虎

歌枕そろはぬ昏をとぢそへて

舟竹

火烧たきにはいる古旦那の内

を

物の葉の透間かぞへて月の色

虎

後を見せて帰るさをしか

竹

といふやうに明らかに「軽み」に移りつつある作風を示してゐるが「後風の二十四句」もその表六句と最後の六句と

を掲げてみると

後風鳶の身振ひの猶寒し

玄虎

虎柱の氷柱長く短き

舟竹

十露盤を片手に米の印して

芭蕉

心あてなき旅のいとなみ

一

けふの月所のは山の猿

二

能岩組よきに秋の水音

三

X

春の日は長柄の傘の絵の模様

一

熨斗を附たる駕舁の紋

三

白粉に千代をや関の姥が顔

二

銭よむわざを専にする

一

風はなは油へる火のちらつきて

三

時を曳ずる棒の片そぎ

二

このやうに、同じく「輕み」に移りつつある頃の作風を明らかに示してゐる。これは二年冬と三年冬との中間に位する『ひさご』の歌仙の作風と比べれば、その間の変遷は瞭然たるものがあるであらう。以上考察してきたところによつてこの二十四句が六年冬の作であることは動かし難いものといつてよいであらう。

芭蕉連句制作年代考

16 三 つ 物 — 元禄七年作 —

(『一葉集』)

長閑さや寒の残りも三ヶ一

利牛・岱水・翁

『一葉集』・『一代集』ともに元禄六年作とする。しかし、元禄六年には、元日の前日(五年十二月晦日)にすでに春が立ち、この句に詠むところ事実が合はない。この句のいふ所と合致するためには、新年になつてから寒の残りが十日以上なくてはならない。そこで、新年になつてから寒がなほ十日以上残つてゐる年を調べてみると左のやうになる。

貞享三年 — 一月十一日 立春

元禄二年 — 一月十五日 立春

元禄七年 — 一月十一日 立春

利牛・岱水ともに江戸俳人であるから彼等と俳諧するためには芭蕉も新春江戸に居なければならぬ。ここに挙げた年には芭蕉はちやうど江戸に居たので、この三つの場合のうち、いづれの年にこの三つ物を作つたかといふことにならぬ。利牛は芭蕉晩年の門弟で元禄六年の冬から頭角をあらはして来るのであるが、それ以前のことに関しては審かでない。ただ、彼とともに『すみだわら』を撰した野坡・孤屋は『続虚栗』においてすでに名を連ねて居り、『句餞別』にもまた句を出してゐる。さうすれば或はその頃から野坡グループの一人として利牛も芭蕉に入門してゐたかもしれない。(断るまでもないことであるが野坡——はじめ野馬——も利牛も『莊子』から採つた俳号である。)また、苔翠は『句餞別』に

山や猶し見てもつめたき門の霜

の句を出してゐる。さうすると、芭蕉がこの兩人と三つ物を作るといふことは貞享三年においても考へられないことではない。しかし、脇・第三と続く

打かへしやく雉子の胴がら

昏水

薑たっに立冬菜のつぼみきり捨て

翁

といふ作風は芭蕉晩年のものであつて貞享のそれではない。利牛入門の時季も未詳であるから、まづ貞享三年作といふことは考へられないであらう。

つぎに元禄二年春はどうかといふと、この当時は野坡グループの俳人達は芭蕉から遠ざかつてゐた。それ故、二年作と見るには作風の上からだけでなく、師弟の交渉の濃度からいつても無理がある。そこでこの三つ物は元禄七年の作であらうと推定されるべきものと思ふ。

以上、制作年代について考察・推定を試みてきた作品のほか、『一葉集』・『一代集』の年代推定が問題になる作品に(イ)梅が香歌仙(『すみたわら』)・(ロ)傘柳歌仙(『鄙懷紙』)・(ハ)五人ぶち歌仙(『統寒菊』)・(ニ)雨柳歌仙(『統猿蓑』)・(ホ)小鮎半歌仙(『芭蕉翁俳諧集』)・(ヘ)空豆歌仙(『すみたわら』)・(ニ)十三句(立句)ひらくとあがる扇や雲のみね 翁(『桃舐集』)等があるが、(イ)(ロ)(ハ)については荻野氏が元禄七年作とされ、(ロ)(ハ)(ニ)については吉田氏が元禄七年作と述べてゐられる。私も拙著『芭蕉連句集』の芭蕉略年譜にこれ等をすべて七年作としておいた。(ただし、右の略年譜では半歌仙については記載を省略してある。)紙幅の制限にも達したし、また右のやうに荻野・吉田両氏の説もあるので、これらの年代考証は省略することにする。